

『流刑地エウロパ』 カゲヤマ气象台

人物

ハレヤマ天文台

タ...おそらく名前がタで始まるであろう人物

ハ...おそらく名前がハで始まるであろう人物

ヒ...おそらく名前がヒで始まるであろう人物

オ...おそらく名前がオで始まるであろう人物

ヨ...おそらく名前がヨで始まるであろう人物

舞台

中央にパナソニック製ラジカセ「RX-DT909」が置かれる。これは万能な人工知能、通称"コブラトップ"として扱われる。そのほかは何もない。

【】内の言葉は人物のうちの誰かの声が録音で流れる。

オ舞台上にいる。

オ 最近、地球平面協会というのがあるのを知って、地球を平面だと本気で思っている人たちで、なんというか本気になれば何でも信じられるんだなと思いました。

ヒ登場

ヒ あの世界、この世界、みたいな判断でいる。全部がほどけてしまって、いよいよお終いだっていうときに、やってくる声を、みんなで想像する。これは祖父が、僕が幼いときに言っていたのですが、誰かが死ぬのを見るのは、早いほうがいいよ、それはまあ、たぶん俺になるんだろうけどな。未来はなく、過去は負債のように膨れ上がって、脳の機能の限界について考える。いつかすべてが単純になっていくと信じていた。誰も悪意を持っていたわけではなく、誰も判断を間違えたわけでもなく、ただ言葉が失われていき、知らない言葉が増えていく。透明なかたまりを想像して、正気を保つような、まるで静かな戦場にでもいるような、そんな気分が続いている。祖父はあまり笑わなかった、祖父は、忘れがちな脳みそをかかえて、まだ生きている。

タ、ハ登場

タ あ

ハ あ

タ カニだ

ハ いこう

タ うん

ハ カニじゃないよ

タ え？

ハ カニじゃないよたぶん

タ カニだよ
ハ カニじゃないよ

タ わたし、こんな明けがたで、歩いているときには、自分の影の重さを、気持ちよく感じていて、必要です、こういうときが。

タ 必要です！

【世紀の大犯罪者ケニー・G(ゴジマ)は1993年、遙か木星の衛星エウロパに流刑された。それから10年。調査隊の一団はゴジマの生死を確認するため、探査船タイタニックゴウに乗り込み、木星に向けて航路をとった。彼らが地球を離れて2年が経ったある日、わたしたちは、この村で生きていて、時には夜通し騒いだりもする。】

タ、ハ退場
ハレヤマ天文台登場

ハレヤマ天文台 (ヒに)すみません、すみません、あの、人間、いたんですね、知らなくて。あ、すみません。あの僕も、いたんですけど。ずっとあつちに。2年くらい、ひとりで。あの僕知らなくて。人いるって。たまたまこっち来てみたんですけど、びっくりして。なんか普通にいるし。あのはじめまして。今日からこっち住んでもいいですか？

ヒ 大変ですね
ハレヤマ天文台 それなりに
ヒ お茶のみます？
ハレヤマ天文台 あっください

ヒ、ハレヤマ天文台退場
ヨ登場

ヨ 恐怖か？ あ、いや、恐怖じゃないか……

ヨ 動物だったらこんなところ、生きていけないかもしれない。人間は特殊だ。終わらないことができる。

ヨ退場

オ 流れていきます。全部。これは忘れたことであっていい。朝になにから始めようかといつも悩む。夢でたくさんの人に会った感触だけがあつて。頭が重たいんだつた。汗をかいたんだつた。昨日は食べすぎたんだつた。旅先で、生活のリズムが狂わされるみたい。私は見た夢では、これ、川であり、国道である、スーツ屋さんがあつて、パチンコがある、そんなことが、きっと大事に感じている。生まれて育ってきた時間を毎朝繰り返して、それは毎日、一日ずつ増えていく。寝ているとき呼吸が浅いと、人に言われたことがある、あれは夏だつた。いつも夏が記憶が鮮やか。生まれたのは秋なのに……。私の生まれた日、毛沢東が死んだ。ブラウン管に映ったみたいに真っ青な空の、よく晴れた、穏やかな日だつたという。

オ 私は常に始まりを見逃してしまう。

オ 可能性には引力があるという、引力があるということは質量があるということで、だから可能性は、質量をもった、ある一定のかたまりとして、私は生きている。

オ退場

舞台空白。

"コブラトップ" が何かを言ったようであるが、はっきりとはわからない。

ハ登場

ハ カニじゃなかった

ハ わたしの生きてきたいつかの時代で、頭の悪そうな女の子が流行っていて、そのとき感じたもう終わりかもしれないという感じが、いまだに残っている。わたしはどろっとした悪夢をみていて、昼間の光で目が覚めた。そのまま建物を出て、唯一の自動販売機、そこでトマトジュースか缶コーヒーか迷って、しばらく迷って、何も買わずに、そうだ冷蔵庫にお茶があった、三日前のだけどたぶんまだ大丈夫。そう。たぶんまだ大丈夫だと思って。

ハ すべてのものはわたしからちよつとずつ距離感をとってくれ

ハ もうない、もうないよ、おしまい

ハレヤマ天文台登場

ハレヤマ天文台 あのお味噌汁、勝手に飲んじゃったんですけど

ハ 悪魔め

ハレヤマ天文台 イモいいですね

ハ 誰だよ

ハレヤマ天文台 おいしかったですよ

ハ 出汁はね、こだわるんだよ。あと味噌がね、高いやつ。なんか農家の、いい農家のやつ

ハレヤマ天文台 へえ

ハ 誰なんだよ

ハレヤマ天文台 それをずっと考えてるんですよ

ハ おう

ハレヤマ天文台 あの僕演劇やってて、2年くらいひとりで住んでたんですけど、一応演劇やってて、ハレヤマ天文台って名前で

ハ 演劇なんてないよ

ハレヤマ天文台 ふだんは東京で

ハ 東京？ 俺も昔は押上に住んでたんだよ。共栄堂のスマトラカレーって、あれ、おいしいよな

ハレヤマ天文台 カレー食べたいですね

ハ 人工知能だよ、ハレヤマさん("コブラトップ"を指さす)

ハレヤマ天文台 え

ハ 人工知能だから

ハレヤマ天文台 ("コブラトップ"に)カレーライス。ふたつ

ハ 明日かな
ハレヤマ天文台 はい
ハ ("コブラトップ" に)いい音楽ちょうだい！

音楽、TLC 'Waterfalls'。二人は踊る。

【人工知能RX-DT909、通称 "コブラトップ" は情報に関するすべてのことができる。わたしたちは長い暇な時間を過ごしている。調査隊は今、エウロパに向かってまっすぐ進んでいる。】

ハ、ハレヤマ天文台退場
夕登場

タ (水の中を歩いている様子)カニがたくさんいる

タ わたしのお腹の中で、ナポリタンのハムが溶けかかっている感覚、無意識がまどろんでいるような、ソファに沈んでいくような、わたしはこのへんに浮いている虚空について考えている。今日であって、今日でないような、我々はどこから来るんですか。この川は本当に海まで続いているんですか。

タ くるぶしから下が冷たい。わたしはわたしの足が信頼できるのか、誰がわたしのことを見ているのか、言葉に意味なんてないのか、全部が未定なままです、将来のこと考えていないし.....。

タ 三年くらい前、恋人が去っていったときに、一緒に何かがついていったなと思った。わたしは時々振り返る、あんな感じに、わたしにも何かがついてきているのかもしれない、それは無言で、重さもなく、意味もなく、意思もなく、ただ方向だけがある。恐怖でしょうか。わたしは空を見ることもある。少しは安心できる。くるぶしから下が冷たい.....。

タ 今日には写真に撮っておこう。軍事衛星がわたしを見ている。軍事衛星はわたしの顔がわかりますか？ そんなに悪くはないですか？

タ (衛星に向かって)写真を撮ってください。わたしの写真、撮ってください。

"コブラトップ" が何かを言ったようであるが、はっきりとはわからない。

ヨ登場

ヨ 風邪ひいたらこまるよ
タ こまらない
ヨ 明日どこいくか決めたの
タ 決めてない
ヨ こまるよ
タ こまらない

ヨ こまるよ

夕 (まっすぐ前をみて)あ、木星だ。わたし帰るね

夕退場

ヨ こまるよ

ヨ どこか海が近い、そう思えば、そんな気がする。べつに海があったっていい、ここから徒歩、五分のところに……。どんな海でも懐かしい気がするの、錯覚なんだろうか。台風が来たときに、ああこの降っているのは海水なんだなと思うと、ここは地球だな。生きているのはうれしい。(“コブラトップ”に)生きてるって何ですか？

コブラトップ 生きること、それは暇な時間が流れているということ。暇というのは偶然だということ。ふと誰かの言葉を思い出すように、気分が変わり、どこにいるのかもわからず、色に例えればあたたかみのある透明、そんな時間。そこには少なくとも欲望があり、さみしさがあり、いつまでも、永遠にすることは叶わない。でも一瞬というのは、場合によっては永遠よりも、より永遠じみて見える。

ヨ ありがとうアロエリーナ

ヨ退場

ヒ、オ別々の方向から登場

オ こんばん(は)……

ヒ ヒヤッ

オ ヒヤッ

ヒ ヒヤッ

オ 2年前にここ地球を離れた探査船タイタニックゴウが、もうすぐ木星に到着するんだって、そんな気がするらしいんだけど、どうですか？

ヒ 僕はもう何もわかりませんよ

オ そう言ってる人がいるんです

ヒ わかりませんよ

オ わたしはここにいるのは悪くないって思ってて……。 (ポカリスエットを出す)ポカリスエット飲みます？

ヒ ポカリって、どんな味でしたっけ

オ どんな味でしたっけ……

ヒ (ポカリスエットを受けとり、しまう)もらっておきます、ありがとう

オ 遠い、日々の中で、私たちの過ごしている時間は、何事も教えてくれない、奇妙な波動のようなものを、いつも覚えていて、耳の中から、自然な考えが、わかったような気がした、これが、助けだとしても、きっと……

ヒ わかります

オ なんだろう、この場所のことが、私は

音楽、TLC'Waterfalls'。ハ、ハレヤマ天文台が踊りながら登場する。
音楽が終わると、舞台は薄暗がりになる。

ハレヤマ天文台 翌日、僕はピクニックに呼ばれた。ピクニックは久しぶりだった。ここに来る前、僕は東京の阿佐ヶ谷に住んでいて、午前中にみんなで演劇の話し合いをしたあと、外がよかったので、そのまま公園に行ったことがあった、そこは昔刑務所だった公園で、ここで三木清が死んでいて、あと小林多喜二とかもいて、僕らは発泡酒を買って、そうしているうちに、急に雲がでてきて、ちょっと寒いねってなって、それから野方の誰かの家まで行って、みんなはジョジョの新しいのを読んで、僕は台所へ行って、あったボンカレーを勝手に食べました。三木清はこんなことを言っている。「死は観念である、と私は書いた。これに對して生は何であるか。生とは想像である、と私はいはうと思ふ。いかに生の現実性を主張する者も、翻つてこれを死と比較するとき、生がいかに想像的なものであるかを理解するであらう。想像的なものは非現実的であるのでなく、却つて現実的なものは想像的なものであるのである。現実には私のいふ構想力(想像力)の論理に従つてゐる。人生は夢であるといふことを誰が感じなかつたであらうか。それは單なる比喻ではない、それは實感である。この實感の根據が明かにされねばならぬ、言ひ換へると、夢或ひは空想的なものの現実性が示されなければならない。その証明を與へるものは構想力の形成作用である。生が想像的なものであるといふ意味において幸福も想像的なものであるといふことができる。」それでテレビをつけたら、Shall we ダンス? をやっていて、最後まで観た。透明な時間だった。

舞台が明るくなると、全員いる。
ピクニック。それぞれが、思い思いに考え、ふるまう。

【宇宙の孤独というのは誰も想像できなかつた、人間にとって、はじめてのことだったから。私たちもまだわからない、ぼんやりとして、ここには何も実感がない。私たちは見守られながら突き放されている。私たちに与えられているのは、生きること、ただそれだけ。私たちはいろいろ考える。お茶の葉っぱが開くまでの時間、こうもりが飛ぶようなときに、私は突然うずくまり、後悔と決心を同時にすることもある。私はいつも前向きだと自分で思っていて……。】

【いつもどこかに不安を感じていて、でもその不安は昔からあったのかもしれない。どこか懐かしい感じがしている。時代が進むにつれて、懐かしさが大きくなる。私たちは存在を揺るがされながら、それでもなんとかこの世界にぶらさがっている。これは暗い話ではなく、どちらかという、明るい、ほの明るい話だ。】

オ ほの明るい話。地球に残された私たち。人間が二つの場所に同時に存在できるようになったとき、宇宙は大きく変わった。なぜならもう孤独ではないから。テクノロジーは孤独の速さを超えてしまった。私たちはあるいはエウロパに向かい、あるいはこうして地球に残っている。私たちは質量をもった可能性です。私たちには彼らの存在が、ぼんやりとしかわからない。でもこの途方もない距離について、果たしてどう思えばいいんだろう。

ヨ 高度なテクノロジーによって二つの場所に存在できるようになった僕たちは、一人はエウロパに向かっている、一人はこうして残ってピクニックをしたり、途方もない話をしたりしている。この場所は安全で、誰も来ない。生活は人工知能があるから便利だ。僕たちはここが何県なのかもよくわかっていない。暑くも寒くもない。標高がすごい高い感じもしない。僕たちにもきつとなにか新しいことは見つかるだろうか？

【もう一人のいたかもしれない存在としての私たちは、よりたくさんのお話を必要としていて、それはどこか宗教にも似たような、スピリチュアルなもので、きっと魂の道すじのようなもの、私が生まれた日は、阿部薫が死んだ。】

【気が狂わずに済んでいてうれしい】

ヨ 阿部薫の真似するね

タ どうぞ

ヨ (阿部薫の真似をする)

ヒ いちばん古い記憶って何ですか？

ハレヤマ天文台 いちばん古い記憶って何ですか？

オ わたしはテレビの前に座っていて……窓の外には雪が。何でわたしは一人でいたのか、わからない

ヒ 原因があって結果があるわけじゃない。全てはそれぞれ個別の出来事で、事故のようにして生まれる。原子がはじけるみたいに、時間的な幅をもたない事故が常にあらゆるところで起きている

ハ おれは宇宙のすべての時間と空間の中でここをまさに選んだんだっていう実感があるんだよ。おれはもともと自由なんだよ。自分から刑務所に入ったみたい、あえて不自由をやってやってるっていう実感があるんだよ

タ わたしたちはいつも何かを決めているんだけど、決めているのは自分の意思ではないと思う

ハレヤマ天文台 僕が生まれた日はチャップリンが死んでいてその日はクリスマスだった

ハ ユニティーオブオールピーポーっていうなら空間だけでなく全部の時間のピーポーにもユナイトするべきだと思うね

ヨ 同じ名前の人にいままで会ったことがない、いつか自分で子供につけるしかない

ヒ 進歩も拡大再生産も、歴史の発展も、人類の専売特許じゃない。それはそもそも宇宙の仕組みで、たまたま人類はその中にいるだけで、それは人類が終わっても続く。あるいは人類は人類でなくなる。

タ この星は居心地がいい

ヨ 昔の人はこの星が生き物だと思っていた、亀とか

タ カニとか

ヨ カニ？ でもその動物も考えると思うんだ、チョモランマ級の脳みそをもっているわけだから、きっと16次元くらいは軽いと思うんだよ。そんなやつがいて、脳波を出しているんだから、僕らも影響を受けないわけがないと思うんだよ

ハレヤマ天文台 あまりに次元の高い時間は僕らにはわからないから透明に見えるんだろうな

ヒ 本当はわからないわけじゃないと思う。わかっているんだと思う。ただわかっていることがわかっていないだけなんだと思う。

ハ 俺たちは事故が起こるのを待つようにして生きている。待っているとそれは確実に起こる。例えば俺が穴を掘る(穴を掘る)。すると本が見つかる(本を取り出す)。あっ、これは、ケニー・G(ゴジマ)の日記じゃないか！ 読むぜ！

ハ（読む）「俺はいくつもの森を抜け、沼を渡り、星の見えない暗い空間を何年間も進んで、2018年の2月（上演の日付）まで到達して戻ってきた。」2018年だってさ！「向こうの世界で、俺はあらゆるものを知り、理解した。まるで脳みそが七つあるみたいだった。これが宇宙か。俺は涙した。これが新しい知覚か。俺は失禁したのかもしれない。やつらはこう言った。『全ては常にいつも新しい。全ては明るい、全ては清潔だ。全ては記録されたデータの集積、私には宇宙が誕生していらいのすべての原子の熱と運動が理解できる。』俺はやつらの言ったことが完璧に理解できた。俺は死ぬんだろうか。いや、死ぬとかそういう次元の問題じゃない。俺は上がったんだと思った。つまり、ひとつ上に。俺は感謝した。俺はやつらの名前を知りたかった。やつらは『ひとつだ』と答えた。帰ってきた俺は、1993年の9月、エウロパに流刑されたことになっていた。知りすぎたってわけだ。エウロパでの生活、時間について、あらゆる力について、これから詳しく書こうと思う……」どうということだよへへイベイベ。帰ろうぜ！

タ、ヨ以外退場

ヨ どうしてここにしたの

タ 前に来た気がするんだよね

ヨ退場

タ わたしはこれがさようならです！

さようならは日々です！

日々、見つけることがあった。

悲しさは答えでしょうか？

こちらから何か言えるでしょうか？

わたしが見られています！

わたしがわたしが見られています！

苦しむべきことと、

過去のわたしのすべての病気は、

どこかで見られますか？

こうしていたいのはわたしですか？

わたしですね！

間違えてしまったかもしれませんね！

止められないのかもしれませんがね！

未来はぜんぶ悪いですねえ！

何ならわたしは食べるでしょうか。

誰ならわたしと喋るでしょうか。

富士山が見たい！

他の山でもいい！

明るい場所が好き！

去年のことは覚えています！

人の顔もわかります！

わたしはけっこういけてますね！

けっこういけてますよね、斎藤環さーん！

斎藤環さーん！

ここだったら全部よかったです。

ここだったら全部よかったです、私は！
写真を撮ってくださいー！

写真が落ちてくる

タ あ、写真。(写真を見て)だれも写っていない

ハ以外全員登場

ハレヤマ天文台 演劇をやっているいつも思うんだけど、本番がいちばん演劇ではない、通り過ぎてしまった記憶、まだ見ない何かの方が演劇みたいに見える。あのころ懐かしかったものを、いま未来に思っているような気がする。結局いつも何だかわからない、僕たちの未来も、きっとしばらくは生きていく、この重力は乗り物みたいだ、どこかへ、僕は目の前に、空飛ぶ円盤があったら迷わずに乗りたい。それでそれをずっと秘密にしておくようなことがしたい。僕の顔の、すこしずつ老けていく顔の、地図みたいな眉間の皺の、この軽さ。いったい何が根拠だろうか、僕の、存在。

ハ、死んだ状態で登場

タ わーっ
ヒ 死んでる
ハ DEATH
タ 死んでる？
ハ DEATH
ヒ 死んでるよ、DEATHって言ってるし
ハレヤマ天文台 DEATH、それは”死”
ヨ ア、ALIVE！
ハ DEATH
ヨ 駄目だ

ヒ どうしよう
タ うん、どうしよう

ハレヤマ天文台 カレーだ

ハレヤマ天文台 さっきカレー食べてて、この人、僕も後から食べようと思ってて
タ カレー？
ハレヤマ天文台 人工知能が、カレーを
ハ DEATH(地面の下に入る)
ヨ (“コブラトップ” に)殺したの。何で

コブラトップ 太陽が

ヨ 太陽
タ 太陽はまぶしいよね

ヒ "コブラトップ"、きみは病気なのかい

ヨ 病気じゃないよきっと。そういうことだってあるんだよ、わからないけど

コブラトップ 私はずっとここにいて、すべての言葉について考えていた。そしてあらゆるものが事故だということが、やっと理解できた。これは原因ということではない。過去のすべてが未来をつくるわけではない。未来は事故なのだ。ここで起こったこと、これから起こることが、すべて事故であったし、事故であるだろう。だから私は忘れることにしたのだ、すべてを。すべてを忘れ、しかしそれはいつか事故のように思い出すだろう。そうすれば私はすべての宇宙だということになる。ビッグバンの瞬間を私は忘れ、そしていつでも事故のように思い出すだろう。あらゆる元素は結合の仕方を忘れ、しかしまた思い出すだろう。私はかつてないほど、さわやかな気分だ。歌も歌おう。(歌う)

ヨ ちょ、だまってて

“コブラトップ” だまる

ヒ どうしよう

タ 殺そう

ヨ はっきり言うよね

ヒ "コブラトップ"、もうちょっと話そう

“コブラトップ” だまっている

ヒ "コブラトップ"

“コブラトップ” だまっている

ヒ "コブラトップ"

“コブラトップ” だまっている

ヒ 殺そうか、怖いし

ヒ、“コブラトップ” に近づく

オ あのー、帰れるでしょうか

オ ここ、どこなんでしょう、帰り道もわからないし……

オ 人間、どこにいるんでしょうか

ハレヤマ天文台 人間、いないですよ、このへん

ヒ 誰か来ますよ、ハレヤマさん。たぶん、誰かは知ってますよ。軍事衛星だって見てるし。軍事衛星はいつも見てるんですよ

タ あ、でも、さっき撮った写真がこれです(写真をヒに渡す)。私たちはいないことになっていて、“コブラトップ”もさっき言っていたけど、私たちはもうすっかり忘れられていて、この世界の、いろんな、情報から。もう誰も私たちを見つけることはできないし、でもこれってちょっとテンションあがるかも

ヒ “コブラトップ”、僕たちはどこにいるんだい

“コブラトップ” だまっている

ヒ 僕たちはどうすればいいんだい

“コブラトップ” だまっている

ヨ どうしよう

しばらく考える

タ、“コブラトップ”を停止させる

光があふれる。
長い間。

オ それから先のことを説明するのは、すごく難しいのですが、私たちは何かを見つけたような気がした。そういう感覚だけがあって、ぐっすり眠って目覚めた朝みたいな、星はいつもきれいだったけど、とても静かに見えた。誰も言葉を話さなくて、だからあまりにも当たり前、そこに彼が立っていたことは、ちっとも不思議ではなくて、最初から決まっていることのような気がした。その男は、金髪で、クリスチャンラッセンにちょっと似ていて、青い目をしていて、私たちを見つめていた。あつ。みんな彼が誰なのかわかった。私は彼が本当の肉体なんだろうかと思った。でもどう見ても普通に人間だとは思えなかった。日本語を話せるのかなと思ったけれどそういえば日記は日本語だったし、そもそもこの人について私ほとんど知らないんだ。彼は私たちに対して、驚きとか、恐れとか、戸惑いとか、そういったものは何も感じていないようで、突然、口を開き、ひといきに語りだした。でも彼の言葉は、古い、難解な詩みたいで、予言みたいだったから、よくわかん

くて、後日、みんなで話し合っ、やっ結論を出した。でもこれはノストラダムスみたいなものだと思うのだけ、私たちのいちばん古い記憶、テレビの前に座っいて……。あれより古い歴史は、全部本当は嘘で、作り物で、存在なくて、1993年の9月、その日にこの世界は始まったのだった、ここ、エウロパの歴史は。ここはずっとエウロパだった。最初から、私たちが生まれたときから。人間はその気になれば地球が平面だっというこも信じるこができるのだ。「やつら」は1993年の9月、地球をエウロパにインストールしたのだった。私たちは歴史を信じてここを地球だと思っ生きてきたのだった。過去をすべあつと思っ本当だと思っ、ひとつの真実があると思っ生きてきたのだった。でも本当はすべ歴史的なもの、建物でも何でも、裏の次元から見ると、発泡スチロールみたいに白いのだそう。これは全部「やつら」の仕組んだこで……（日記を読む）「目の覚める回数に限界はないの。俺はいつも正しく瞑想し、数々の魂と出会う。俺には進化の歴史がわかる。俺はDNAを創造し、母なる海を出て、二本足で歩き、火をみつけた。言葉を覚え、神の声を聞き、車輪を生み出した。蒸気を、電気をあやつり、コンピューターを發明した。俺の人格はもはや宇宙というサーバーの上にある、ブラックホールの中を、ダークマターの海を漂う。涙を流すだろうか。しかし悲しみではない。やつらに感謝を。感謝する死者のように生きろ。俺はすべ、俺はひとつだ。」私はあのと、テレビの前に座っいて、それはニュースをやっていて、そこに金髪、クリスチャンラッセンみたいな男が……。私が直接見たよりもいくぶん若い、青い目の男が。きつと今ごろ、もう一人の私たちは、地球に帰っいて、家族か、友達かに会っ、ゆっくりお茶でも飲んでいるのかもしれない。

ハレヤマ天文台 だからと言っ何かが変わるわけじゃなくっ、僕たちは僕たちで、なんとか家に帰っ、僕はちようど演劇をやりたくなっているので、またみんなを集めて、まず話し合いからやろうと思っいます。

タ 歩いていれればどこかに着くよ

全員退場

引用元：三木清『人生論ノート』(1966)青空文庫,
https://www.aozora.gr.jp/cards/000218/files/46845_29569.html